

# 公益の風 #50

東北公益文科大学大学院 公益学研究科 非常勤講師

鳥居建己



わたしたちは「死者」を身近に感じることができない。すでに死んだ者である死者は、死んでいるため、「いま・ここ」には現前しない。しかし、目の前に物理的に存在しない存在にも共感し、その心を想像する能力をわたしたちヒトは有している。他者の心を想像し、理解する能力は「心の理論」と呼ばれ、ヒトに特有の能力だともいわれている。わたしたちは、こうした能力をもって、目の前で泣いたり怒ったり笑ったりしている人物のみにではなく、見えないところにいるのであろう人物や神仏にさえ、共感

## 死者を想い死者とつながる

することができると生き物である。

わたしたちは、折々に触れ、死者を想い、死者とつながる機会を持つ。かつてのような複数の世代が一つ屋根の下に同居する家族の形態は稀有になり、「家」という概念の希薄化が進む今日でも、死者を家族というコミュニティの成員として認め、その死者との関わりを大事にし、維持する慣行が続いている。こうした死者と関わる機会が最も多いのが、夏のお盆であろう。明治5年12月に太陰太陽暦からグレゴリオ暦への変更といいわゆる改暦が実施され、明治6年1月とされたため、旧暦と新暦との間にひと月のずれが生じた。そのため、現在の日本では、旧暦を使用していたころと同様に7月(新暦の7月のため旧暦では6月)中の旧暦のお盆と、月遅れの8月(新暦の8月のため旧暦では7月)中の新暦のお盆の地域が混在している。

山形県では新暦(現在の暦)の8月にお盆の期間を設ける地域が多い。一般的には8月7日ころに墓掃除をおこない、13日ころにお墓参りに行く。そして、墓地や家の庭先などで迎え火を焚いたり、家の仏壇の前には盆飾りや盆棚をつくったりして、死者を迎える準備をする。多くは15日あるいは16日になると送り火を焚いて、家に迎えた死者を送る。また、盆飾りや盆棚の供物を近所の川に流すということも、かつては多く見られた。死者を家のゲストとして大事に迎え、2〜3日のもてなしの後で送るといふ慣習をいまでも毎年繰り返している家庭はまだそれほど珍しくない。そして、庄内地方では、この時期に「もり供養」という死者との関わりも見ることができるといえる。

もり供養は、死者は家からそう遠くない里山(「もり」)に留まっていられるとして、お盆の後(21日から24日の間)に、死者をもりで供養する習俗である。鶴岡市の三森山や庄内町の三ヶ沢など、地域との結びつきが強いもりで、集落や家を見守る死者に花や米や線香などを手向けて供養する。また、集落内や集落に近い寺院でももり供養が行われている。

ちやうど今年の秋に、東北公益文科大学大学院(鶴岡キャンパス)において、「地域の歴史と文化」と題した講義が予定されている。わたしは「文化」の範囲を担当することとなっているため、この機会に、もり供養をはじめ、庄内地方に特有の民俗を手がかりとしながら、地域における人々のつながりを履修生とともに振り返ってみたいと考えている。



集落内の寺院でのもり供養の案内

東北公益文科大学大学院(鶴岡)  
10月・11月開講(90分×15回)  
**「地域の歴史と文化」**  
科目等履修生 募集

山形県に暮らす人々が重ねてきた営みを、歴史と文化の2つの観点から紐解いていくことで、身近な地域に対する理解と考察を深めることを目指します。歴史の観点からは、幕末に活躍した庄内出身の志士・清河八郎の書簡(活字)の講読などを予定しています。文化の観点からは、黒川能やもり供養など庄内地方に特徴的な民俗などを通じて人びとの暮らしを熟考します。

出願締切 9月19日(金)  
問合せ TEL0235-29-0555